

自動車、変圧器、電気機械器具、建築部品などのプレス加工メーカー。営業と金型製作技術に優れる関係会社と連携し、顧客に高品質な製品を提供する。300トンサーボプレスをはじめ主力のプレス機の戦略活用が奏功し、業績は上昇傾向にある。

曾根工業株式会社

蛍光灯関連等の 電気部品等を生産

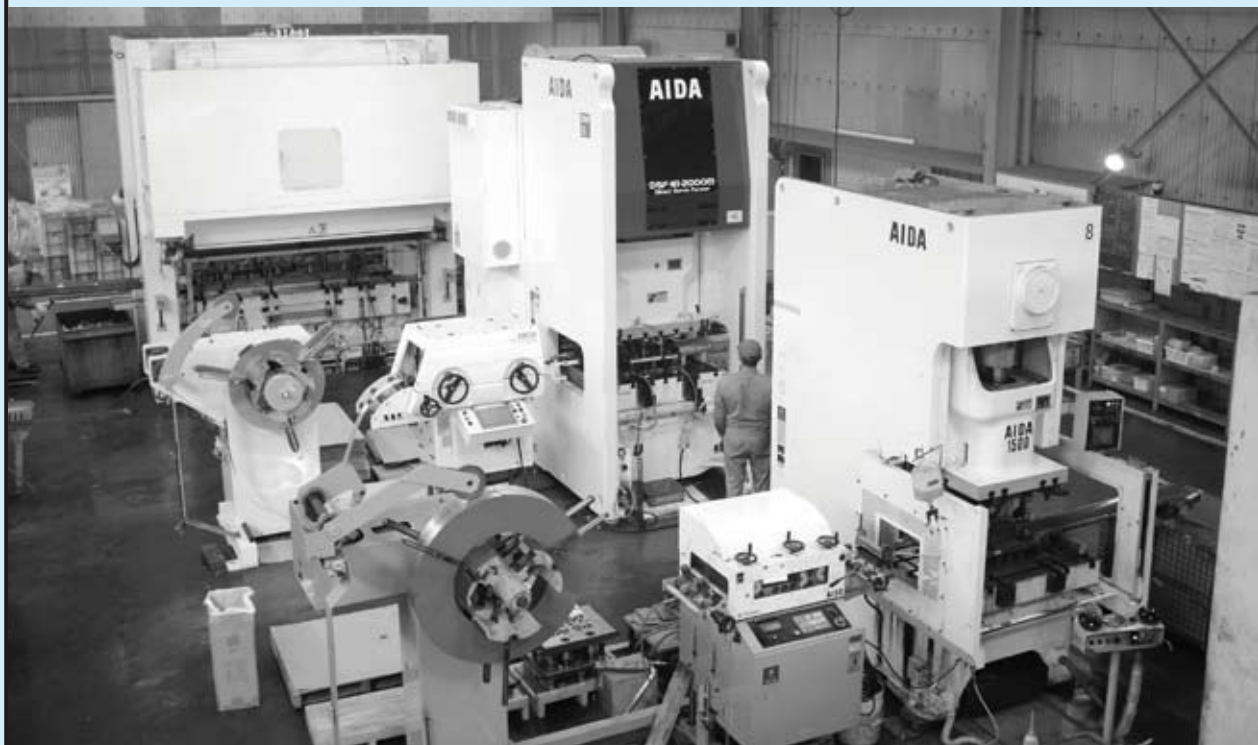
曾根工業(株)は、1957年に曾根彰氏(高橋一男社長の義父)が創業。1970年に蛍光灯用の磁気式安定器、ネオン変圧器など電気系の製品製造や金型開発などを行う四変テック(株)(香川県仲多度郡多度津町)の資本を受け入れ、取引を開始。以来、主に磁気式安定器の鉄心やケースカバー、変圧器に使用する部品のプレス加工を手がけた。

高橋社長が入社したのは1995年。前職は大手家電メーカーの営業社員だったが、先代が急逝したことから会社を継いだ。「モノづくりのことはほとんど知らなかったが、入社当時は売上も安定しており、何とか会社を回すことができました」と高橋社長は当時を振り返る。最盛期の売上は8億4000万円で、ひと頃までは電気関連部品の売上が80%を占めていた。

300トンサーボプレス機導入が転機に

しかしその後、売上高は漸減傾向をたどった。主な原因は、主力の蛍光管の点灯方式が磁気式から省エネ効果の高い電子式に代わり始めたことだった。そして2000年代に入ると売上高はピーク時の半分以下に低下した。転機が訪れたのは2010年。「既存の小型プレス機50台での事業では、経営が立ち行かなくなる」と危機感を募らせた高橋社長は、現状打開策として自動車用部品のプレス加工に進出を考え、加圧能力が高く、大型金型による高精度な製品の生産が出来る高性能な順送プレス機が必要と判断し、AIDA製の300トンサーボプレス機(NS2-3000(D))を導入した。

折しも、関係会社の四変テック(株)(精機事業部)が自動車用部品のプレス加工事業の拡大を進めていた時期で、曾根工業(株)に生産委託の話があり、両社の思惑が一致し、新規導入した300トンサーボプレス機で生産をスタートさせることができた。



▲ 300トン、200トンサーボプレスと150トンメカプレス順送ライン